

## 「日本におけるコレラ流行報告」について

—明治初期の米国人によるコレラ報告—

松村 紀明

帝京平成大学ヒューマンケア学部

2008年9月上旬、米国メリーランド州ベセスダのNational Institutes of Health（国立衛生研究所、以下、NIHと略記）内にあるNational Library of Medicine（国立医学図書館、以下、NLMと略記）に所蔵される日本の古医書の調査を行った。

NLMが所蔵する日本古医書は1,700点であり、北米大陸で最大級であるが、これまでの所蔵文献の全体像および個別文献に関する調査・研究は充分からはほど遠い状況である。

今回の発表は、この調査で発見された、明治初期の日本におけるコレラの流行状況を記した米国人によるレポートについて、その概要を報告する。

本史料の蔵書タイトルは“An account of the cholera epidemic in Japan.”で、“HMD Collection”にあり、請求番号は“MS F 278”である。

1886年9月9日に、東京在住の米国在日大使、Richard B. Hubbardによって書かれたレポートであり、報告先は当時の米国国務省長官、T.F.B. Bayardとなっている。

レポートの形式は、タイプ打ち5枚（うち報告部分は4枚）、手書き2枚（報告部分は2枚）であり、さらに説明が書かれた紙片が別途2枚添付されている。

本史料の内容は、内務省衛生局による主要都市部や全ての道府県のコレラの患者発生数と、死亡者数の一覧を基にしたものとなっている。特に、東京、東京15区部、京都、京都区部、大阪、大阪区部と西成、神奈川、横浜区部、兵庫、神戸、新潟、富山などの都市、開港地で患者数が多いことが示されており、当時の日本におけるコレラの流行状況について、米国が関心を抱いていたことが伺えるものとなっている。

また、この一覧表の後ろには、同年の東京近辺の気候・衛生状況や、流行が収束の兆しを見せていることなどについての言及があり、米国人のコレラについての認識を伺えるものとなっている。

開国とそれに伴う人や物の往来により、安政年間以降、日本は世界的なコレラの大流行に巻き込まれて行く。明治時代に入っても患者数・死者数が万単位の流行が数年おきに波状的に続いて行く。本史料は、このような日本のコレラの流行状況と、それに対して米国が関心を抱いてことを伺い知ることができるものと言えよう。

なお、本発表・本調査は、日本学術振興会の科学研究費補助金による研究、基盤研究(B)「米国国立医学図書館等の所蔵の日本古医書の調査・目録・データベースの作成」(代表者：順天堂大学特任教授・酒井シヅ、課題番号19406017)のプロジェクトの一部である。